

# ゾディアック

2007(平成19)年6月16日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★★



監督＝デビッド・フィンチャー／出演＝ジェイク・ギレンホール／ロバート・ダウニー Jr. / マーク・ラファロ／アンソニー・エドワーズ／イライアス・コーティーズ／ダーモット・マーローニー／ドナル・ローグ／ブライアン・コックス／ジョン・キャロル・リンチ／チャールズ・フライシャー／クロエ・セヴィニー（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2007年アメリカ映画／157分）

……ゾディアックと名乗る連続殺人鬼が、新聞の一面に載せるよう要求した暗号文には一体ナニが……？ こんな犯人の追及にとりつかれたのが2人の刑事と敏腕記者、そして風刺漫画家。『セブン』（95年）のデビッド・フィンチャー監督が、2時間37分という長丁場の中それを丹念に追っていくから、観客も覚悟を決めて座ることが大切……？ この映画だけはパンフレットを買って予習と復習をしなければ、あなたも「久しぶりに爆睡した」というアホバカと同じ運命に……？

## かなりの予習と復習が必要……？

「アメリカ犯罪史上、これほどまでに人々を震撼させ、そしてこれほどまでに人々を惹きつけた犯人は他にいない。その連続殺人犯は、自らを“ゾディアック”と名乗り、自分の犯罪をあたかもゲームのように演出した」とパンフレットに書かれているが、そんなゾディアックのことを知っている日本人はまず皆無……？

だって、その連続殺人事件の第1号は1968年12月20日だし、殺人鬼が自ら「ゾディアック」と名乗ったのは、1969年7月4日の独立記念日における、人妻のダリーン・フェリンと警察官のマイク・マジョーの殺人事件からだから、今から40年近く前のこと。第2の犯行以降ゾディアックは新聞社に暗号文を送りつけて、その掲載を迫り、「殺人は面白い」と豪語するメッセージを広くアメリカ国民に訴えながら、劇場型犯罪をたて続けにくり返したらしい。しかし、1971年以降その数はめっきりと

減り、1978年4月に最後の手紙が送りつけられることに……。

この映画は、そんな連続殺人事件を追った新聞記者や刑事たちの姿を描くものだが、何せ膨大な資料を1つずつ示しながら謎めいた犯罪に迫っていくものだけに、その過程は極めて複雑かつ難解。したがってこの映画を観るについては、事前の予習と鑑賞後の復習が必要……。鑑賞後エレベーターの中で、3人の若者グループが「ああ、さっぱりわからん映画を観た。久しぶりに爆睡した」と口々に言いあっていたが、事前の予習なしでは、こんなアホバカと同じようになるのがオチ……？

## 4人の男たちの執念は……？

「全米史上初の劇場型殺人」と呼ばれるゾディアックを追いつめることに執念を燃やしたのは、まずサンフランシスコ・クロニクル紙の敏腕記者ポール・エイブリー（ロバート・ダウニー Jr.）。そして、本件を担当するサンフランシスコ市警のデイブ・トースキー刑事（マーク・ラファロ）とその相棒のウィリアム・アームストロング刑事（アンソニー・エドワーズ）。また、サンフランシスコ・クロニクル紙の風刺漫画を担当する漫画家ながらエイブリーと同じようにゾディアック事件に興味を示し、その犯人探しに取り組んだのがロバート・グレイスマス（ジェイク・ギレンホール）。

刑事が犯人逮捕に全力を挙げるのは当然だが、新聞記者のエイブリーがゾディアックを追ったのは、新聞紙にゾディアック指定の文章を掲載させられる屈辱感の裏返しともいえるべき記者魂の表われ……？ 世の中には完全犯罪など存在せず、殺人をくり返していればどこかに必ず手がかりを残すはずだが、ゾディアックの場合は警察の捜査はいつも後追いで、ゾディアックからあざ笑われているような状況。『セブン』（95年）で恐ろしい犯罪の姿を描いたデビッド・フィンチャー監督が、2時間37分という長丁場で描いた本作は、次々と起こる連続殺人をスクリーン上に示しながら、ゾディアックを追うトースキー刑事とアームストロング刑事、そしてエイブリーたちの姿を丹念に追っていくから、観客もついていくのが大変……。もっともグレイスマスだけは多少スタンスが違っていたようで、彼のそれはかなり傍観者の……？ しかし、そうだからこその他の3人と違い、彼の執念は長続きできたのかも……？

## どちらが先につぶれるか……？

エドガー・アラン・ポーが書き、日本では江戸川乱歩によって有名となった怪人20

面相と探偵明智小五郎の知能戦は興味尽きない面白さがある。トースキー刑事とアームストロング刑事は警察の威信をかけた職務の遂行だから楽しむ余裕はないが、当初エイブリーは少しはそんな余裕をもっていたし、グレイスマスは大いにそれをもっていたはず……。しかしゾディアックの追及は容易にはかどらず、その追及にのめり込めばのめり込んでいくほど、焦燥感を深めていくことに……。

そんなゾディアックと捜査陣との長期にわたる戦いの結果、エイブリーは酒におぼれて健康を失うことになり、トースキー刑事とアームストロング刑事は刑事としてのキャリアを失っていくことに……。その結果、今なおゾディアック追及に執念を燃やしているのは当初傍観者だったグレイスマスだけ……。

しかし、あれから10年以上経ち、今は結婚して子供もいるグレイスマスが家庭をかえりみず、ゾディアックの追及しか頭の中になくという状態は明らかに異常。これでは、グレイスマスの妻がやってられなくなるのは当たり前……。というわけで、妻子にまで逃げられてしまったグレイスマスだが、その執念はなお続き、ついに「犯人は〇〇だ」というところまでたどりついた。さて、その最後の追及は……？

## 原作は何とグレイスマス著の『ゾディアック』

この映画の原作は、何とこの映画後半の主人公となるグレイスマスが執念をもって調べあげて書いた351頁の本『ゾディアック』。つまり、ゾディアック事件の追及にのめり込み、何としても事件を解決したいと望んだグレイスマスは自ら、行方不明の目撃者や容疑者を捜し出して調査を重ね、さらに固く口を閉ざす警察でも資料を読みあさったわけだ。そしてついにして、自分なりのいくつかの確信に到達し、それを集大成したのがこの『ゾディアック』という原作。

パンフレットによれば、7歳の時に自宅からわずか20マイルほどのところで起きたゾディアック事件を知ったデビッド・フィンチャー監督は、グレイスマス同様(?)このゾディアック事件に強くひかれ、事件の全容を細部に至るまでしっかり描きたいと望んだらしい。したがってこの映画にはそんなナマの資料がいっぱい詰まっているから、一生懸命観ていると疲れることはまちがいなし……？

ちなみに、原作者のグレイスマスが「この映画を見た誰かが、あるいは本を読んだ誰かが、暗号文を解読してゾディアックの言葉を解明し、その名前と所在を我々に告げてくれることを、私は今でも期待している」と述べていることは重要で、ゾディア

ック事件はまだ解決しておらず、今なお継続中だというわけだ……。

## 暗号を解読したのは……？

この映画のチラシには、ゾディアックからサンフランシスコ・クロニクル紙、サンフランシスコ・エグザミネー紙、バレーホ・タイムズ・ヘラルド紙の各編集者宛てに送られてきた暗号文が一面に載っている。それはギリシア記号、モールス記号、天気記号、アルファベット文字、海軍手旗信号、星占い記号でいっぱい奇妙なもの。そして、ゾディアックがそれに添えた手紙には、「お前らの新聞の第一面にこの暗号文を載せろ。この中には俺の素性が隠されている。お前らが69年8月1日金曜の午後までにこの暗号文を載せなければ、金曜の夜は殺戮の夜になる。週末の夜ごと、俺はあたりを徘徊し、ひとりきりの人間を殺して回る……」と書かれていた。

詳しいことは映画を観てのお楽しみだが、この暗号文を解読したのは警察でも CIA、FBI でもなく、また国家安全保障局や海軍諜報機関の暗号解読者でもなく、ノースサリナスの高校教師ドナルド・ジーン・ハーデンだったというから驚き……。映画の中でもパンフレットの中でも、その暗号解読の仕方が語られているが、それを聞いたとしても私たちがそれを理解するのは困難なことは当然。今から10年前の1997年に神戸で発生した酒鬼薔薇事件における声明文は、「さあ、ゲームの始まりです」という書き出しから始まる挑発的で自己顕示欲の強い文章が綴られていたが、ひょっとしてその原形となったのがこのゾディアックにおける暗号文……？

それはさておき、この映画のそしてゾディアック事件の不気味さを理解するためには、ハーデンが読み解いた暗号文を見るのが1番と思われるため、あえてその全文をここに掲げておこう。それは「俺はものすごく楽しいから人を殺すのが好きだ。森で獣を殺すよりずっと面白い。なぜなら、人間は最も危険な動物だからだ。殺しは最高にワクワクする。女とセックスするより楽しい。何よりいいのは、俺は死んだら天国で生まれ変わり、俺が殺した連中がみんな俺の奴隷になることだ。俺の名前は教えない。教えたらお前たちが、俺の死後の奴隷収集を、邪魔したりやめさせようとするからだ。EBEORIENTEMETHHPITI」。以上で私のこの映画についての評論を終え、ゾディアック事件追及の詳細は、すべてあなた自身の目でじっくりとスクリーンを観て確認してもらうことにしよう……。

2007(平成19)年6月18日記